

緩歩

かんぽ

- 第2号 -



霊山拝登・富士登山研修 平成18年8月30日～31日 (詳細 2・3面)
 富士山清掃 平成18年10月30日 (詳細 6面)

題字
 洞慶院 丹羽鐵山老師

会長就任に当たって

静岡県第一宗務所青年会
 第八期会長

高橋俊行



本年四月より、静岡県第一宗務所青年会第八期会長の重任を拝受することになりましたので、ここに謹んでご挨拶申し上げます。

当青年会が発足して今年で十五年目、これまでOB諸老師方の熱い道念と獅子奮迅のご活躍により、素晴らしい発展を遂げて参りました。それを引き継ぐには不肖不才、ふつつかな身ではございますが、更なる会の発展のために第一曹青会員諸兄、第八期執行部諸兄のお力を拝借してこの任を果たす所存でございます。

現在、会員九十一名がそれぞれ四つの委員会のいずれかに所属し青年会の事業活動に携わり、不易流行の教化問題・環境問題等に対して青年僧の視点から取り組んでおります。

しかし全会員の参加を目的としたため、能動的な会員ばかりではなく受動的な会員も見受けられ、組織全体の脆弱さ、個人意識の希薄さを露呈しているとも言えます。

今や世界有数の大企業となったトヨタ自動車では、現場を改善するために、「何故を五回繰り返す」ことを奨励しています。このことは知の作法として共有されており、個人だけの問題にはしないので、堂々と追究できるそうです。当青年会においても会員それぞれが正念を持ち、互いに問いかけることが和合の精神であるのではないのでしょうか。

正念の「正」という文字は「一を止(とど)む」と書きます。「一」はすべての根本であり、すべての始まりであります。その「一」を見つめ、お互いが「何故」と確認し合い、会員一人ひとりが全心身で真実を追究できる組織に発展することを切に願う次第でございます。

当青年会活動の一步一步の歩みに対しまして、宗務所管内諸老師の皆様方にはこれからもより一層のご指導ご鞭撻のほど、切にお願い申し上げます。ご挨拶の言葉とさせていただきます。

合掌



富士登山に当たって

教化研修委員長 梶川正則

平成十八年八月三十日、三十一日と「霊山拝登・富士登山」を教化研修委員会の企画にておこないました。身近に富士山を感じつつも、なかなか拝登する機会には恵まれません。会員一丸となって富士山頂を目指すぞうということになりました。

三十日午後三時、五合目を総勢三十七名で出発。五合目から元祖七合目まで約二時間二十分で到着。その間天候もよく、時折、霧がかかる程度でした。登山にも慣れてきて、すれ違う時の挨拶は心地よく感じられました。

だんだん酸素も薄くなるにつれ、呼吸も大変になり、疲労が出てくる中、互いに相手を気遣い体をさすってあげる者、相手のペースに合わせ休む者、共に励まし合い、普段では見ることのできな一面を垣間見ることができました。

七合目から九合目まで約二時間四十分、体は限界に近づき、次の一歩が踏み出せなくなってきました。「進まなければ

富士登山



出発前、五合目にて記念撮影

景色も何も変わらない」「誰もが同じ条件」と心に言い聞かせ体に鞭打ちながら到着。途中、眼下に広がる雲海、そして降ってきそうな星空には感激しました。

翌三十一日午前三時、起床。体調を崩している者もいましたが、他の登山者と共に、御来光に向けて元気に出発。傾斜がより一層き

つくなり、山頂が手の届く所に見えるにもかかわらず、距離が縮まりません。五時十五分、到着と同時に御来光。歓声をあげる者、手を合わせる者、感激のあまり涙する者、そして我々第一曹青は世界の平和と、会の発展を祈念して

～ 8月31日



万歳三唱をしました。

山頂より下界を見たとき、圧倒的なまでに雄大な自然を前に、自分の小ささを実感することができました。人と人、人と自然、基本的なあたりまえの挨拶、いたわり、感謝、励まし合うことを肌で感じることで、貴重な体験ができました。

富士山は、日本を象徴する山であり、青空高くそびえ立つ秀麗な姿は広く海外まで知られています。遠い昔、私たちの先祖の目にも、風光明媚な姿を映したのでしょうか。しかし、

私たちにとって富士山はあまりにも身近すぎて日頃の美しさ、素晴らしさを見落としがちになります。この度、会員相互一致団結して拝登できたことを心から感謝申し上げます。とともに、あらためて美しく気高い姿に畏敬の念を抱かずにはいられませんでした。

富士山に登ってきたよ

慈眼寺住職 柴田英憲

「出身はどこですか?」「静岡です」「それじゃあ富士山の近くだね」「静岡県人なら旅先などで一度はしたことのある会話ではないでしょうか。しかし、そこで「そうですね。でも登ったことはありません」と答えてしまうのはやはり残念です。富士山に登ったことがないということに引け目を感じたことのある人は少なくないはずです。

以前、私もそうでした。しかし今は違います。「登ったことありますよ」と、胸を張って静岡県民として当然のことのように言い、またその体験を堂々と話すことが出来ます。

何事も経験です。参加者の中には「本山安居よりきつかった」という人もいました。しかし、「大変だなあ」という思いの中にキラリと光るすがすがしさ。これが何にも代えがたい。参加した誰もが感じたことと思います。

盆の疲れも癒えない八月終わりに、こういう機会がなければ今後一生登るチャンスはないだろうと挑んだ甲斐がありました。

富士登山を終えて

安養寺副住職 青島永紘

富士山に登る前、色々な方々に、富士山について、たくさんの方々の話を聞きましたが、結局、想像していた以上に苛酷で厳しいものでした。

今回、富士山登山を終えて一番印象に残っているのは、すれ違う人に挨拶をしたことです。私は、安居中、白山に登りました。登山の際、すれ違う人に挨拶をするということは、その時知りました。今回も何も考えず、ただ挨拶をしていま



頂上で万歳三唱

登山拝霊

た。二時間ほど経ち、私は高山病になり、とても次々に来る人に挨拶を返せないでいました。しかし、今考えれば、登山に慣れている人、慣れていない人、色々ありますが、全ての人が同じ条件にあったという事です。声を掛け合うことで、辛い時の励ましになります。名前も知らない人々

との何気ない会話で辛さを忘れさせられました。それは、安居中の事と似ていると思いました。そして富士山で出会った人との「縁」という事に気付きました。同じ状況、苦しい時に、同じ場において助け合う事がどれほど大切かを、あらためて考えさせられました。そして、下りの際には、横浜に住む同安居者に会うという偶然もありました。

この富士山登山では、安居中の事を思い返させられた様な、何か不思議な気持ちになりました。

安居(あんい) = 僧堂修行の事。

富士登山

大嶽菜月(小5)

私は富士山に登るのは二回目です。七月二十九日に初めて登り、八

平成18年8月30日

合目でダウンし、下山しました。今回は再挑戦ということですが、がんばることにしました。

少しずつ登り、一步一步ふみしめながら登りました。新七合目までは楽に登れました。「あ、八合目だ」と思いがなると元祖七合目で「え〜っ」と思いました。ここからがすごく大変でした。

気持ち悪くて頭も痛くて死ぬかと思うほど大変でした。休みながら少しずつ登りました。やっと、八合目に着いた時は、もう夜の七時で九合目まで本当に行けるのかと思いました。登るにつれてだんだん暗くなり前がよく見えなくなりました。母の後をフウフウ言いながら登りました。もう眠くて休憩しているのだんだん目が開かなくなり、コックリ、コックリしてしまいました。



御来光

やっとな合目に着いた時、本当に登れたんだとホッとしました。おいしそうなカレーが出たけど気持ち悪くて頭も痛くて食べられませんでした。そのまま寝ました。寝ている時は何も感じなくてぐっすり眠れました。「菜月、起きて」と言われ、もう朝かなと思いましたが、外は暗かったです。いよいよ頂上まで行けると思い、出発しました。でも少し登るとすごく気持ち悪くなつて話す元気もなく、フラフラと歩いていました。休憩しても頭が割れそうに痛くて、おなかの中でへんな物がぐるぐる回っているようで倒れそうでした。「戻る。登れない」と言ってお下山しました。

今、思い出すと「ア〜ア〜」とし後悔しています。でも荷物を持ってくれたり、チョコをもらったり、苦しいときに助けて頂いたお坊さん達にすごく感謝しています。私は頂上まで登れなかったけれど、いい体験ができてよかったです。また、今度登る時は頂上まで登りたいです。(大嶽菜月さんは、富士川町宗清寺様の御三女で、今回は、お母さんと一緒に参加してくださいました)

お袈裟の由来

お袈裟制定の由来は、ビンピサーラ王が仏弟子と外道とを間違えた話など、律藏中にいくつも見られます。総じて言えば、仏弟子専用の衣服を定める必要が生じたことよって、お袈裟が作られたようです。かつては、仏弟子もバラモン教等の修行者と同じ格好をしておりましたが、混乱が生じてしまうので、一目見て仏弟子と分かるような格好を定めたということでしょう。

また、釈尊が阿難尊者を伴って遊行しておられたとき、水田の風景を目にしました。そして、仏弟子の衣服を、その水田のように作りなさいと阿難尊者に告げられました。それ以降、仏弟子の衣服は、**お袈裟**現在の袈裟のように田相を模して、何枚も水田が重なっているように、布片を継ぎ合わせて作られるようになりました。また、布切を使うことにより、世間的な値打ちがなくなり、盗難を避けることができるようになったということです。



瑩山禅師護持の掛絡（九条衣）石川県・永光寺蔵

これは、お袈裟の特徴の一つである「截縷せつる、布をはぎ合わせてつくること」の由来ですが、その他に「染色(ぜんしき)」「却刺きやくし」がお袈裟の大きな特徴といえるでしょう。

お袈裟の色については、世間的に値打ちのないような地味な色に染めるよう定められました。

また、お袈裟は「却刺縫」という縫い方で作るよう定められております。これは、並縫だと、一ヶ所ほどけてしまえば全体がほどけてしまうので、丈夫な縫い方を採用したということのようです。

宗門のお袈裟

現在、宗門で三衣といえば、絡子（五条）、七条、九条乃至二十五条（注一）の三種類が、通常用いられていることは言うまでもありません。

ただし、現在の服制規程を見ますと、略服としての掛絡（から）の他に、正服としての五条衣が認められています。この五条衣は、七条衣や大衣（本文では、九条以上のお袈裟のことを「大衣」と呼びます。本来、大衣は九条以上のお袈裟を意味するものであつて、直トツのことではありません）と同様な着け方をするタイプのもを指します。これは、昭和二十七年（一九五二）に出された「服制規程案」から載せられた事項です。その事情はというと、絡子を用いるのは禅宗のみで、他宗派は肩から掛ける五条衣を用いるので、各宗合同の集まりの際、他宗と合わなくなってしまうということだそうです。つまり、他宗が五条衣を着けるのに合わせるため、絡子では見た目上不揃いになってしまうし、また、七条衣を着ければ、他宗と条数が合わなくなってしまう。そこで、絡子でない五条衣も服制に取り入れられたということ



明峰素哲禅師護持の掛絡（七条衣）富山県・光禅寺蔵

です。しかし、実際には、そのような五条衣が使用されることは、ほとんどないと思われます。

それはさておき、宗門のお袈裟が、現在の、環付き絡子、環なし七条、環なし大衣の三点セットになった経緯について記してみたいと思います。

そもそもは、嘉永三年（一八五〇）に起こった「三衣争議」（正式な名称かどうか不明）に端を発します。その年、永平寺五十世玄透即中禅師（一七二九〜一八〇七）が著された『永平小清規』を宗門全寺院に実行させようという通達が出されました。当時の宗門の儀則は、黄檗宗の影響を受けていたこともあり、道元禅師の古規から大きく外れていたため、その復

特集

興が唱えられたのでしよう。しかしながら、『瑩山清規』に依拠する諸寺院は『永平小清規』の実行はできないと主張しました。そこから、両山間の争議に発展していくわけですが、争点の一つが、お袈裟の形式であったわけです。

復古派は、お袈裟の環は古規に反するので、環なしのお袈裟を着けるべきだと主張したのでした。環は莊嚴道具の一種であって、不如法なものだということなのでしょう。環は、お袈裟が摺り落ちないために付けられた、鈎紐(こうちゆう)という部分が装飾的になることにより誕生したものであるようです。その由来から考えてみると、環は、可能な限り装飾を排した如法衣の考え方には、本来的に合致しないといえるでしょう。しかし、一方の伝統では、お袈裟に環を付けることになっておりましたから、環なしにせよとの主張は承服し難いところでした。

何度かの裁定、妥結を経て、ようやく宗門全体として一応の統一制度が定められたのは、時代も替わり、明治十八年(一八八五)のことでした。折

しも政府は各宗派に宗制を確立せよと通達し、山風による不統一はできない限り放置しておくべからざる状況にあったようです。宗門においては、滝谷啄宗禅師と畔上椋仙禅師を筆頭に協議が重ねられ、現代の服制の基となる案ができあがりしました。すなわち、五条衣は環付き絡子、七条衣以上は環なしにすると定められたのです。言ってみれば、五条衣は『瑩山清規』の門風を取り入れ、七条衣以上は古規に従うという折衷案に落ち

注一：大衣の条数は九から二十五の間の奇数を取ることになっています。ですが、有相袈裟・無相袈裟という分類があり、後者は法を条数で表現したお袈裟で、実際に目に見える形として存在するものではありません。無相袈裟には、六十条・二百五十条・八万四千条があります。それぞれ六十種の妄心を除滅すること、二百五十条の比丘戒、八万四千の法門を象徴しています。

なお、正法眼蔵『袈裟功德』巻には、「通肩搭には六十条以上のお袈裟を用いる」となっておりますが、この場合の「六十条以上」とは、十五条衣以上のことを意味します。十五条衣以上のお袈裟の各条は、二長一短といつて、長い布片を三枚、短い布片を一枚の計四枚の布片を縫い合わせられてきております(衣財の都合で布片を増やしても構わない)。したがって、十五条の場合、使われる布片の合計数は六十枚となります。「六十条云々」の表現は、このような理由によるそうです。

着いたわけです。

「この続きは青年会HPにて。」

<http://www.sizusosei.com>

「特集」をクリックしてください。」

研修会

「五条衣を縮小した絡子について」

右記ホームページのお袈裟の特集を承け、教化研修委員会主催により、平成十九年三月十五日、静岡市瑞光寺様に、愛知学院大学教授・川口高風老師をお招きし、「五条衣を縮小した絡子について」という演題で、研修会が行われました。

川口老師は、他宗の様々な五条衣をご披露下さいました。同じ五条衣はいえ、宗派や歴史によって多様な体裁があり、興味深い講習となりました。



瑩山禅師の掛絡を模したものを。



臨濟宗の大掛絡。三条に見えるが、左右に一条ずつ折り込んであり、五条となっている。



上座仏教の五条衣(安院会)。下半身を覆っている。五条衣の基本である。



三緒(みつお)袈裟(天台宗(五条)臍から膝までを覆う)。

道元禅師もこのようなお袈裟を掛けていたのではないかと川口老師は推論されている。

富士山清掃

平成十八年十月三十日、ボランティア委員会の企画で、富士清掃活動をおこないました。会員二十八名の参加がありました。

富士山の環境保護、保全、改善活動を展開している、NPO市民団体「富士山クラブ」の指導の下、清掃活動を行い、約六五〇キログラムのゴミを回収しました。

又、平成十九年三月九日、静岡市葵区の沿上清掃工場を見学し、ゴミの処理について研修会をおこないました。

富士山クラブHP
<http://www.fujisan.or.jp/>

富士山清掃に当たって

ボランティア委員長 磯田英之

今回、研修会として会員が外に出るにできる活動は何かと考えた時に、思い浮かんだのが富士山のごみ拾いでした。富士山は、ごみ・し尿問題、生態系の破壊などさまざまな環境問題をかかえています。そして、二千ヶ所近い不法投棄の場所があるそうです。富士山の麓の脇道を少し入ってみると、大量のごみ不法



回収したゴミと記念撮影

投棄)が散乱しています。心無い人のポイ捨てや不法投棄によって、富士山の自然、日本の名誉まで汚してしまっているのです。

清掃終了後は、会員も富士山クラブのスタッフもみな汗をかきながら、満足感ある笑顔を浮かべていたのが印象的でした。今回、二千分の一ヶ所がきれいになっただけでもありませんが、小さな活動から環境を守る大切さを学びました。この清掃活動により会員それぞれが何かを感じ、日々の行動を改めて振り返り、また今後、このような活動に積極的に参加していただければと思います。

花まつり

平成十八年四月、花まつりの宣伝と平和を祈念して、花配り(花の種又は生花)を行ないました。



静岡市では、四月八日午後五時から、JR静岡駅北口地下通路にておこないました。



焼津市では、四月八日午後四時三十分から、JR焼津駅前にておこないました。



藤枝市では、四月八日午後四時三十分から、JR藤枝駅前にておこないました。



沼津市では、四月七日午後五時から、JR沼津駅前にておこないました。

歳末助け合い托鉢

平成十八年十二月、各地で歳末助け合い托鉢をおこないました。



静岡市では、十二月二日 静岡駅周辺にて托鉢を行いました。浄財は五六八八五円で、SBS愛の都市訪問」に全額寄付しました。



焼津市では、十二月五日、焼津駅周辺にて行いました。浄財は二〇二七二円で、焼津市社会福祉協議会へ届けました。



島田市では、十二月五日、島田駅周辺で行いました。浄財は一五八一〇円で、島田市社会福祉協議会へ届けました。



沼津市では、十二月五日に沼津駅周辺にて行いました。浄財は合計一〇二二〇五円で、沼津市社会福祉協議会に届けました。

平和祈念托鉢



平成十八年十一月十一日(世界平和記念日)、静岡市街において、平和祈念托鉢を行いました。

当日はあいにくの雨でしたが、瑞光寺様より徒歩にて市街地に向かい、托鉢を行いました。

集まった浄財は二一四二一円でした。全額SVAシャンティ国際ボランティア会を通じ、アフガニスタンへ寄付いたしました。

スポーツ親睦会

平成十八年度は、スポーツ親睦会が三回おこなわれました。

五月八日、小笠山総合運動公園において、静岡県内曹洞宗青年会合同のスポーツ親睦会(フットサル)が行われました。終了後、掛川グランドホテルにて表彰式と懇親会が行われました。

六月六日、焼津市陸上競技場において、曹洞宗第一宗務所主催スポーツ親睦会(野球)が行われました。終了後、黒潮温泉にて表彰式と懇親



県曹青スポーツ親睦会

会が行われました。

十一月十七日、沼津市愛鷹球場において、曹洞宗第一宗務所主催スポーツ親睦会(野球)が行われました。終了後、万葉の湯にて表彰式と懇親会が行われました。

カート親睦会



平成十八年十一月二十八日、モーターパーク・クイック浜名において、曹洞宗第一宗務所青年会初の試みでカート親睦会が行われ、三十二名の参加がありました。

カートは初めてという会員がほとんどだったので、大きな差がつかず、白熱した試合となりました。

卒会者

- 三 教区 法明寺 副住職
 - 四 教区 西山 光俊 師
 - 四 教区 西岩寺 副住職
 - 七 教区 野原 至道 師
 - 七 教区 玉泉寺 住職
 - 長谷川文徳 師
- 長い間お疲れ様でした。これから
もご指導よろしくお願い致します。

新入会員

- 二 教区 東泉寺 監寺
 - 藍谷 崇文 師
 - 三 教区 福寿院 徒弟
 - 水野 将之 師
 - 四 教区 正法寺 徒弟
 - 兒玉 正見 師
 - 五 教区 西来寺 徒弟
 - 熊山 昭徳 師
 - 五 教区 誓願寺 徒弟
 - 伊藤 晋英 師
 - 七 教区 保泉寺 徒弟
 - 翠 英昭 師
 - 十一教区 香橘寺 徒弟
 - (清源寺 監寺)
 - 磯田 和明 師
- よろしく願います。

前会長挨拶

第七期会長 杉山隆光



宗務所管内御寺院様をはじめ、会員の皆様には日頃より青年会活動に御理解、御協力を賜り厚く御礼申し上げます。

早いもので、二年が経ち、その間、行き届かぬ点も多々ございましたが、自分なりに精一杯務めさせて頂き任期を終える事ができました。特に今期は「お地藏さんのお助け袋」「花まつりののぼり旗」等の新企画に宗務所管内御寺院様には絶大なる御協力を頂き、重ねて厚く御礼申し上げます。

私達は、日々の生活の中で、嫌な事があつたり、気分が落ち込む事があつたりします。そんな時は、「どうせ」「やっぱり」「無理だ」「困った」「できない」「無駄だ」などのマイナス言葉が口から出やすくなります。言葉が否定的だと考え方もますます否定的になり、また行動も消極的になっていきます。会長を務めるにあたり、私はこれらのマイナス言葉を一切使わず、全てプラス志向で物事を考えて参りました。何をす

るにも「やっつて出来ない事はない」と。この思いを理事様、委員長様、会員の皆様にお汲み取り頂き、大輪の花を咲かせる為の活動が出来た事、深く感謝申し上げます。特に事務局の皆様には、集まって頂く事が多く、常に青年会の仕事を優先して頂きました。「最高の事務局員だった」と声を大にして言いたいです。最後に、今後とも管内御寺院様には、より一層の御理解、御協力を賜ります様お願い申し上げます、会員の皆様には、更なる積極的な参加の程をお願い申し上げます。



お地藏さんのお助け袋 (在庫僅少)



花まつりののぼり旗

新執行部紹介

- | | |
|-----------|---------|
| 会長 | 高橋 俊行 師 |
| 副会長 | 徳月 正道 師 |
| 副会長 | 梶田 瑛浩 師 |
| 監事 | 香村 一孝 師 |
| 監事 | 石橋 龍哉 師 |
| 東部理事 | 山田 哲哉 師 |
| 東部理事 | 荻田 宣史 師 |
| 中部理事 | 野原 全州 師 |
| 中部理事 | 岩上 寛真 師 |
| 西部理事 | 鈴木 俊呉 師 |
| 西部理事 | 古市 太郎 師 |
| ボランティア委員長 | 柴田 尚道 師 |
| 教化研修委員長 | 青野 貴芳 師 |
| 広報委員長 | 大村 則道 師 |
| 企画委員長 | 荒見 法孝 師 |
| 事務局長 | 磯田 英之 師 |
| 会計 | 小島 健布 師 |
| 庶務 | 杉山 大禅 師 |
| 書記 | 松岡 広也 師 |
| 書記 | 今枝 真一 師 |



編集後記

何とか創刊第二号まで辿り着く事ができました。今後とも、当広報誌を通して会の更なる活動の紹介と宣伝、情報の発信等に努めて行きたいと思えます。そのためにも会員全体の協力が必要であり、率先的な協力体制を切望して止みません。

次号からは新たに編成された委員会によって編集作業を継続して行きますが『緩歩』の名に恥じぬよう、今後とも当会には、旧態に捉われ過ぎない自由な発想と、青年僧らしく失敗を恐れぬ活発な活動を期待し、緩やかに、しかしながら着実に歩歩前進して行かれんことを祈念致します。

『緩歩』編集委員
広報委員長 松永寛道

青野貴芳 中村雄介
梶田瑛浩 寺澤孝道
大村則道 平尾直毅

発行 静岡県第一宗務所青年会
事務局 島田市神座一五七五 慶雲寺内
発行責任者 杉山隆光
編集 静岡県第一宗務所青年会 広報委員会
発行日 平成十九年四月一日